優秀賞（ｔｖｋかながわ MIRAI 賞）

優しさのバトンをつなぐ

鎌倉女子大学中等部　1 年　丸田（まるた）　楓夏（ふうか）

「席、どうぞ。」

「座りますか？」

この言葉を、私は掛け続けると決めている。

私は中学生になってから、毎日電車に乗って学校に通っている。以前大きな荷物を抱えたおばあさんが乗ってきた時に私はすぐに席を譲ったが、まわりの人は動く気配がなかった。電車に毎日乗るようになってから半年ほど経つけれど何度かそんな場面があった。頭の中で譲るか、どうしようかと迷っていても、実際に行動を起こす人は少ないと感じた。私は、お年寄りや妊婦さん、大きな荷物を持っている人が乗ってきたら、すぐに席を譲るようにしている。それは、私にはとても心に残っている思い出があるからだ。

私は小学二年生の時に、タイに行ったことがある。私が家族と電車に乗ると、私たちが乗り込んだ瞬間に、座っていた現地のたくさんの人たちがパッと立って笑顔で席を譲ってくれた。日本でそんなシーンに出会ったことがなかったのでとてもびっくりした。と同時に、慣れない場所で歩き回って足が棒になっていた私は、座れることが本当にありがたかった。そして彼らの満面の笑顔を見てこちらも自然と笑顔になり、心が温まった。両親もすごく嬉しかったようで、タイの思い出話をしていると必ずその話が話題に上がる。あの時の温かい気持ちは、五年経って中学一年生になった今でもはっきりと覚えている。

席を譲ってくれたタイ人は、日本人の子どもに席を譲ったことなんて覚えていないだろう。あの素早さ、自然さから考えて、きっと彼らにとって子どもに席を譲るということはごく当たり前のことであり、日常茶飯事なのだ。それはなんて温かく、素晴らしい習慣なんだろう。譲った側にとっては大したことでなくても、譲ってもらった側は、その時の嬉しさを忘れない。そして逆の立場になった時に今度は自分が譲ろうとする。優しさが優しさでつながっていく。

でもそれだけでは足りないということに、最近私は気がついた。2020 年度の国土交通省の調査によると、「あなたは普段、公共交通機関で優先席に座りますか」という問いに対し、1000 人近くの回答者のうち、「ほとんど座らない」と答えた人が五割近くいるが、「時々座る」と答えた人が約三割いた。私も、普通の座席が空いていない時は時々優先席に座ることがあった。

ところがつい最近、私の仲の良い友だちが持病を持っており、心臓に 10 ミリメートルの穴が空いていることを知った。とても元気な彼女とそんな大変なことが全く結びつかず、打ち明けられた時とてもびっくりした。見た目では何も分からなくても、本人しか知らない事情を持っている人がいるのだということを目の当たりにして、頭をなぐられたような気持ちだった。とても元気そうに見えても、実は心の病気があったり持病を持っていたりする人がいるのだ。

しかし、そういった人たちの事情は、見た目だけでは判断できず、本人から聞かないと分からない。だからこそ、優先席にそれを必要としている人がいつでも座れるように、優先席には座らないようにしなければと思った。友だちの話を聞いてからは、どんなに疲れていて座りたくても、一度も優先席に座っていない。

電車での出会い、関係性は多くの場合一回きりだ。見ず知らずの人に譲っても譲らなくても、自分の生活は何も変わらないし、自分がやらなくても、きっと他の誰かが譲るだろう。迷って行動を起こせない人には、そういった考えが頭の片隅にあるのかもしれない。でも、たった一言の「どうぞ」「座りますか」という言葉が、誰かをほんの少し助けることができるなら、人を幸せな気持ちにすることができるなら、私は「どうぞ」と声を掛け続けると決めている。たとえ断られるとしても、役に立てる可能性があるなら、一歩踏み出して声を掛ける。たとえ重たい荷物を持っていても、優先席には座らない。そういう優しさのバトンがあちこちでつながっていけば、世界はもっともっと温かく優しくなるだろう。あの日のタイの人たちの笑顔が、私を動かし続けている。